

マイウェイ

No.139
2026

かながわのオーケストラ

令和8年9月発行 ● 発行人 片岡達也 ● 編集人 利根山邦夫 ● 発行 公益財団法人はまぎん産業文化振興財団 〒220-8611 横浜市内西区みなとみらい3-1-1 ☎ 045-225-2171 (直通) ㈱神奈川新聞社



オーボエ(写真の楽器)の奏者はリードを自ら製作します。地道な作業を経て生まれる音がオーケストラ全体の基準音となるように、華やかな演奏の裏には、各奏者の目に見えない積み重ねが息づいています。

写真提供: 神奈川フィルハーモニー管弦楽団

表紙の撮影: 藤本史昭

ミニ連載 GREEN×EXPO 2027特集② GREEN×EXPO 2027で体感する循環という物語

公益財団法人はまぎん産業文化振興財団



「温かい音色」の先へ

神奈川フィルハーモニー管弦楽団

地域に根ざした活動で愛され続ける神奈川フィルハーモニー管弦楽団。幾多の危機を乗り越えるなかで育まれた「温かい音色」の魅力と、その歩みを紹介します。

取材協力：神奈川フィルハーモニー管弦楽団 構成・文／福田敬道、細井香里、デザイン：小山亜紀子

2026年4月18日の定期演奏会にて。撮影：藤本史昭。

危機を支えた11万人の思い

しかし、その歩みは決して平坦なものではありませんでした。

平成の行政改革で、債務超過がある団体は公益法人として存続困難な状況になりました。当時、楽団は単年度では黒字決算を続けていたものの、存続のためには、累積債務の解消が必要でした。

そこで楽団は年間300回を超える公演活動を展開し、団員自らがロビーに出て次回公演の案内や寄付の呼びかけを行いました。その一方でファンも11万人を超える存続嘆願署

神奈川が誇る 日本屈指のオーケストラ

1970年に設立された神奈川フィルハーモニー管弦楽団以下神奈川フィルは、神奈川県を本拠地とするプロ・オーケストラで、専門誌の人気投票でも上位の常連として知られています。

年間200回を超えるという公演数は、同規模のオーケストラの中でも際立っており、その約3分の1は音楽教育事業とのことです。毎年約5万人の子どもたちに、本物の演奏に触れる機会を提供しているのです。地域

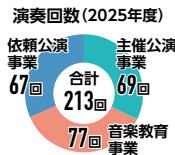
名を集めるなど、楽団と一体となって支援の輪を広げました。

こうした熱意が地域社会を動かし、企業や自治体からの支援にもつながりました。楽団員、ファンの熱意と努力の結果として、楽団の公益法人存続

貢献に注力する姿勢は設立当時から
の伝統で、「小学生時代に聴いた神奈川フィルの演奏に感動し、後に入団した」という奏者も少なくありません。
地域に音楽の種をまき、次の花を育む――それが神奈川フィルの存在意義の一つとなっています。

神奈川フィルハーモニー 管弦楽団の歩み

1970年	ロリエ管弦楽団として設立
1971年	神奈川フィルハーモニー管弦楽団へ改称
1996年	オペラに積極進出
2001年	石田泰尚氏ソロ・コンサートマスター就任
2011年	債務超過による存続危機に
2013年	債務超過を解消
2020年	コロナ禍を機に動画配信を本格化
	創立50周年
2022年	沼尻竜典氏音楽監督に就任



音楽教育事業
演奏会形式やワークショップ形式など多彩な手法で音楽を届け、子どもの豊かな情操と感性を育てています。



写真提供：神奈川フィルハーモニー管弦楽団



沼尻竜典氏(左)と石田泰尚氏(右) 2026年4月18日の定期演奏会にて。
撮影:藤本史昭。

音楽監督・沼尻竜典(りゅうすけ)氏

2022年、神奈川フィル音楽監督に就任。1990年ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝以後、各国のオーケストラで客演し、国内外で数々のポストを歴任。飾らない人柄から演奏会でのブレイクも人気で、曲目解説のために「津軽海峡冬景色」を熱唱されたことも。

石田泰尚氏のプロフィールはP7に掲載。



YouTubeで視聴する

まずはYouTubeで神奈川フィルの演奏を視聴してみませんか。動画でもライブのきらめきが伝わるはずです。まずはベートーベンの「田園」がおすすめです。



沼尻氏はドイツの歌劇場で音楽総監督を務めた経験を持ち、演奏だけでなくプログラム構成やホール全体の空気感までプロデュースできる音楽家です。オペラの本場で培った経験で、神奈川フィルの表現の幅をぐっと広げました。

一方の石田氏は、卓越した演奏技術と強い存在感で知られる「神奈川フィ

沼尻・石田両氏が拓く新しい響き

現在の神奈川フィルを語るうえで、音楽監督の沼尻竜典氏と首席ソロ・コンサートマスターの石田泰尚氏の存在は欠かせません。



リハーサルを見学する

「かながわアートホール」では、見学ギャラリーにて神奈川フィルのリハーサルが見学できます(予約不要、無料)。公開リハの予定は、かながわアートホールのサイトの「イベント情報」ページでご確認ください。

かながわアートホール
横浜市保土ケ谷区花見台
4-2 (県立保土ケ谷公園内)
TEL:045-341-7657



を実現することができたのです。

次なる試練は、新型コロナウイルス感染症の影響による公演活動の停滞です。演奏会の中止が相次ぎ、再開の見通しも立たない中、団員たちはネット動画を通じて演奏とメッセージを発信し続けました。これらの動画はステイホーム中のファンを支え、ファンも団員の思いを自分のことのように受け止め、両者の絆はより強固なものとなりました。

同楽団の演奏がしばしば「温かい音色」と評される背景には、演奏者とファンが幾度もの困難とともに乗り越えてきた歴史があるからかもしれません。

「顔」です。指揮者の意図をいち早く理解し、それをオーケストラ全体へ伝える要として、25年以上にわたり楽団を支えてきました。繊細かつ大胆な演奏力と情熱的なリーダーシップは、神奈川フィルならではの魅力を形づくる原動力となっています。

二つの稀代の個性に導かれ、神奈川フィルが奏でるハーモニーを、ぜひ一度体験してみてください。

チケット情報

神奈川フィルの公演は、限定特典がうれしい定期会員がおすすめです。ネットならさらに割引もご用意しています。



神奈川フィルと石田イズム

神奈川フィルハーモニー管弦楽団 首席ソロ・コンサートマスター 石田泰尚氏インタビュー

鋭い眼差しと圧倒的な存在感。7月下旬、神奈川フィルのリハーサル会場に石田泰尚氏を訪ねました。ひときわ目を引く風貌の奥には、音楽への信念と表現を追求する熱い情熱が息づいていました。

撮影：太下美紀

3歳からヴァイオリンを始めた石田氏は、国立音楽大学を首席で卒業するや、22歳の若さで新星日本交響楽団の副コンサートマスターに就任し、わずか2年後には同楽団のコンサートマスターに抜擢されます。

2001年に神奈川フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターとして招かれ、現在は首席ソロ・コンサートマスターを務める傍ら、自らプロデュースする弦楽アンサンブル「石田組」を率います。

石田組は2023年にはサントリールホール公演3公演を、翌2024年には日本武道館公演を立て続け

に完売させ、クラシックの枠を超えた人気と存在感で、常識を刷新する快進撃を続けています。

音で築いた25年の信頼

神奈川フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターに就任して25年を経て、石田氏はコンサートマスターという役割について次のように語ります。

「指揮者の音楽性をいち早く察するのがコンサートマスターの仕事です。それを自分の音や演奏する姿で団員に伝えていく。団員がそれを受け止め、70人、80人が一つになる瞬間

首席ソロ・コンサートマスター 石田泰尚氏

1973年川崎市生まれ。神奈川フィルの首席ソロ・コンサートマスターとして同楽団を率いながら、石田組、YAMATO String Quartet、トリオ・リベルタなどのユニットで独自の表現を極める。2020年4月より京都市交響楽団ソロコンサートマスターを兼任。2025年に横浜みなとみらいホールの「プロデューサー in レジデンス」事業の第3代プロデューサーに就任。使用楽器は1690年製G.Tononi（写真）、1726年製M.Goffriller。服は京都の「SOU・SOU」、眼鏡は鯖江の「JAPONISM」を愛用。

かなフィルは、今はもう
十分メジャーでしょう。

があるんです。その瞬間こそが、一番の魅力ですね。」

大勢の奏者を、指揮者一人ですとめ上げるのは容易ではありません。コンサートマスターは、指揮者の求めるテンポや音楽表現を自らの演奏で示しながら楽団を導き、一体感と演奏の完成度を高める「第2の指揮者」としての重要な役割を担います。

石田氏は、その重責を担ってきたモチベーションをこう語ります。

「コンサートマスターという仕事は本当に魅力的です。楽団を信頼し、同時に団員からも信頼されなければ、25年も続けることはできません。

ん。」

5年前に出版した著書『音楽家である前に、人間であれ!』(音楽の友社)に、「神奈川フィルにはもっとメジャーになってほしい」と書いた石田氏ですが、その思いについて改めて尋ねると、迷いのない答えが返ってきました。

「かなフィルは、今はもう十分メジャーでしょう。」

その言葉には、四半世紀にわたり仲間たちと歩みを重ねながら築き上げてきた確かな実績への自負と、楽団への揺るぎない信頼がにじんでいました。

偉大な指揮者との出会い

石田氏の神奈川フィルでの歩みを語るうえで、欠かすことのできない二人の指揮者がいます。

一人は、石田氏を神奈川フィルへ導き、長年にわたって神奈川フィルを率いてきた、名誉指揮者の現田茂夫氏です。現田氏は、石田氏がまだ20代前半という早い時期からその才能を認め、長く高く評価し続けてきた人物であり、いわば石田氏の最大の理解者の一人です。

「現田さんには本当に可愛がっていただきました。(神奈川フィルと

の縁も含めて)本当に感謝しています」と、はにかむように笑います。

その意外な笑顔に誘われ、ふとこんな質問を投げかけてみました。

「ひと回り年上の現田さんは、石田さんにとって兄のような存在ですか。それとも父のような存在ですか?」

石田氏はしばらく考えた後、静かにこう答えました。

「アニキでもオヤジでもない。現田さんは現田さん、っていう感じだね。」

その一言に、二人の関係性が凝縮されていました。兄でも父でもない唯一無二の存在なのでしょう。





YouTubeで視聴する

神奈川県フィルの石田コンマスを初めて視聴するのなら、ハイドンの「告別」がおすすめです。指揮者なしのアンサンブル演奏中に、団員が一人また一人と舞台を去って行くミステリアスな展開で、最後には…。石田さんの表情にも注目です。



音楽を楽しみながら、 一生演奏を 続けてほしいんです。

そしてもう一人が、現在の神奈川県フィルで音楽監督を務め、指揮もとる沼尻竜典氏です。

「沼尻さんは音に妥協しない人です。耳がものすごく良くて、全部の音が聞こえているんです。そしてよくしゃべる楽しい人です。」

沼尻氏のリハーサルは、団員らと絶えず対話を重ねながら、妥協のない緊張感と、音楽を創り上げる喜びとを見事に両立させていくスタイルです。石田氏は、そんな沼尻氏の姿勢に深い敬意を寄せています。

現田氏と沼尻氏。二人の偉大な指揮者との出会いは、石田氏の音楽人

生に大きな影響を与えただけでなく、神奈川県フィルのサウンドをより魅力的なものへと育んできました。

音で語る、石田氏の流儀

横浜みなとみらいホール「プロデューサー・in レジデンス」第3代プロデューサー（2025年4月〜2027年3月）でもある石田氏は、後進の育成にも精力的に力を注ぎます。

「音楽を始めた人には、プロを目指すかどうかにかかわらず、音楽を楽しみながら、一生演奏を続けてほしいんです。」

その思いの原点には、自身が所属

していた藤沢ジュニアオーケストラでの経験があります。なかでも高校2年生の定期演奏会で、ソリストとして出演したピアニスト・花房晴美氏の演奏は、石田氏に大きな衝撃を与えました。そのときの感覚を言葉にしてみようと、返ってきたのはこんな一言でした。

「はあー！という感じ。言葉にならない。それが音楽。」

だからこそ、学生を指導するときには、まず自ら演奏して聴かせることを大切にしているといいます。

「弾いて聴かせたほうが早いんですよ。たくさん弾いて、それを聴い

て、音楽っていいなと思ってもらえたらうれしいですね。」

技術や理論を教える前に、まず音楽の楽しさや感動を伝える。それが石田氏の変わらぬ指導哲学です。

最後に、県内のアマチュア演奏家へのメッセージをお願いしますと、石田氏は笑顔でこう答えました。

「そのうち行きますよ。急に聴きに行きますよ。」

音楽を愛する人々との距離を分け隔てなく縮め、音楽を通じてつながり続ける。その姿こそが、ヴァイオリニスト・石田泰尚氏の大きな魅力なのかもしれません。

神奈川県に響く市民の音楽

アマチュアオーケストラの魅力

神奈川県は全国でもアマチュアオーケストラ活動が盛んな地域です。県内には40を超える楽団があり、それぞれが定期演奏会や地域での演奏活動を行っています。その楽しさや神奈川県らしさを聞いてみました。



連続と続く音楽文化

県内で最も伝統があるアマチュアオーケストラ団体は、1932年に設立された横浜交響楽団です。90年以上にわたり県内のアマオケ界をリードし、11月4日開催予定の定期演奏会で通算750回目を迎えることは、世界的にもまれな実績です。

一方で、2000年以降に若い世代が立ち上げたオーケストラも少なくありません。いずれにも共通するのは「音楽を通じて人と地域をつなぎたい」という意識です。市民音楽家たちは、地域に潤いをもたらし、文化都市・神奈川を彩っています。

一人では作れない圧倒的な響き

神奈川セリエスオーケストラは2011年に創立された比較的新しい楽団です。県内の四つの大学（横浜国



練習は、日曜日の午後が多いという神奈川セリエスオーケストラ。30歳前後の団員が最も多いという若い楽団です。



神奈川セリエスオーケストラ 公演情報
〔第14回定期演奏会〕11月1日（日）14時開演／みなとみらいホール／無料・全席指定・要予約。



大、横浜市大、神奈川大、専修大の学生・卒業生たちが中心となって立ち上げた楽団で、楽団名の「セリエス（Series）」には「音楽でつながりたい」

という思いが込められています。

「神奈川で一番愛されるアマオケになろう」をスローガンに、定期演奏会だけでなく、アンサンブルを楽しむための小編成演奏会なども積極的に開催しています。

ところでアマオケの楽しさとは何なのでしょうか。

「実は、ピアノ以外の楽器は、誰かと一緒に演奏することを前提に作られているんです」と創設者で代表の和田篤さんは言います。

「オーケストラは、まず50人以上の演奏者が必要です。年齢も仕事も異なる多くの人が、時間を合わせ、息を合わ

団員の年齢や職業はさまざまです。最高齢である88歳のチェロ奏者が元気に弓を引く傍ら、インターナショナルスクールに通う高校生が、バイオリンの見事な運弓^{ガイニング}を披露しています。

実は、この高校生の曾祖父と祖母は川響の元団員で、ご両親も川響で出会い結婚されたので、本人でなんと四代目です。川響の伝統を感じさせると同時に、アットホームな魅力が伝わるエピソードです。

地域の楽団同士が刺激し合う

川崎市のアマオケ活動で注目した



月曜日（以前は平日の別の曜日のこともありました）の夜になると、団員たちは川崎市内の中学校の特別教室に集まります。指揮者の指導を受けながら、2時間の練習を楽しみます。

せることは決して簡単ではありません。その高いハードルを乗り越えて指揮者の元に音が一つに重なった瞬間、一人では絶対に作れない圧倒的な響きが生まれます。この一体感こそが、オーケストラの一番の面白さです。」

88歳と16歳が譜面台を並べる

前出の横浜交響楽団に次ぐ歴史を持つ川崎市民交響楽団（川響）は、1952年に創立され、来年2027年に創立75周年を迎えます。

長年にわたり活動を続けてこられた理由について、六代目運営委員長（代表）の森三樹さんに尋ねると、「たとえ



川崎市民交響楽団 公演情報
〔第204回定期演奏会〕10月18日（日）14
時開演／カルッツかわさき／大人1,000（前
売800）円、小中高生500（前売400）円。



ば、練習日は平日の夜に設定しています。これは創立当初から続く伝統です。週末は家族との時間を大切にすることが、良い演奏につながるだけでなく、楽団を長く続ける秘訣にもなっています」と笑顔で語ってくれました。

いのは、複数の楽団が協力して地域を盛り上げる姿です。

川崎市の年末の風物詩「かわさき市民第九コンサート」は1989年に始まり、現在では市内4つのオーケストラ（川崎市民交響楽団、麻生フィルハーモニー管弦楽団、宮前フィルハーモニー交響楽団、高津市民オーケストラ）が連携して持ち回りで演奏を務めます。

また、2004年のミューザ川崎シンフォニーホールのオープンを記念して始まった「ミューザ川崎市民交響楽祭」では、前出の4団体のメンバーによる混成楽団「かわさき市民オーケ

ストラ」が編成されます。単独の演奏会では難しい大規模な楽曲に挑戦で



川崎市制100周年を記念した「ミューザ川崎市民交響楽祭」で演奏する、4団体のメンバーによる混成楽団「かわさき市民オーケストラ」。

きる機会で、著名なプロ指揮者やソリストを客演に迎えることが多く、アマオケの枠を超えた聴き応えのあるステージが毎年企画されています。

前出の森さんは、「これほど楽団同士のつながりが強い地域は、日本中でも珍しいのではないだろうか。文化とは、お金に替えられない豊かさのことだと思っています。私たちはその豊かな価値を楽しみながら活動しています」と語ります。

さらに、「次の世代にもこの文化をぜひ受け継ぎたいですね」と、演奏会で小学生向けに特別招待席を設置し始めたことなどを聞かせてくれました。

市民音楽家によるこうした活動の積み重ねが、川崎市が提唱する「音楽のまち・かわさき」を形づくっているのです。

フィナーレのないハーモニー

コロナ禍という大きな試練を乗り越えた今も、神奈川県内では新たなアマチュアオーケストラが誕生し続いています。

さらに、楽団の枠を越えて音楽家が集う「神奈川県民アマオケ祭」という新たなプロジェクトも始まり、演奏者同士の交流はこれまで以上に広がっています。

	楽団名	創立年	次回の演奏会
川崎エリア	川崎市民交響楽団	1952	〔第204回定期演奏会〕10月18日(日)14時開演／カルッツかわさき ホール
	麻生フィルハーモニー管弦楽団	1983	〔第82回定期演奏会〕10月18日(日)14時開演／麻生市民館 ホール
	宮前フィルハーモニー交響楽団	1991	〔2026かわさき市民第九コンサート〕12月27日(日)14時開演／ミューザ川崎シンフォニーホール
	高津市民オーケストラ	1992	〔第33回定期演奏会〕2027年3月7日(日)14時開演／多摩市民館 大ホール
横浜エリア	横浜交響楽団	1932	〔第750回定期演奏会〕11月4日(水)19時開演／横浜みなとみらいホール 大ホール
	横浜フィルハーモニー管弦楽団	1977	〔第94回定期演奏会〕12月6日(日)13時30分開演／横浜みなとみらいホール 大ホール
	横浜室内管弦楽団	1978	〔第62回演奏会〕2027年1月31日(日)14時開演／神奈川県立音楽堂
	横浜シティ・フィルハーモニック	1980	〔第81回定期演奏会(第1993回トヨタコミュニティコンサート)〕10月11日(日)14時開演／横浜みなとみらいホール 大ホール
	横浜管弦楽団	1984	〔第81回 定期演奏会〕10月18日(日)13時30分開演／神奈川県立音楽堂
	神奈川セリエスオーケストラ	2011	〔第14回定期演奏会〕11月1日(日)14時開演／横浜みなとみらいホール 大ホール
三浦・湘南エリア	横須賀交響楽団	1956	〔創立70周年記念 第140回定期演奏会〕10月25日(日)14時開演／よこすか芸術劇場[大劇場]
	藤沢市民交響楽団	1959	〔第122回定期演奏会〕2027年4月25日(日)14時開演／鎌倉芸術館 大ホール
	鎌倉交響楽団	1963	〔第128回定期演奏会〕11月3日(火・祝)14時開演／鎌倉芸術館 大ホール
	湘南フィルハーモニー管弦楽団	1977	〔第45回コンサート〕2027年2月28日(日)14時開演／茅ヶ崎市民文化会館 大ホール
	茅ヶ崎交響楽団	1983	〔第87回定期演奏会〕2027年5月23日(日)14時開演／茅ヶ崎市民文化会館 大ホール
	平塚フィルハーモニー管弦楽団	1991	〔ウインターコンサート2026〕12月20日(日)14時開演／ひらしん平塚文化芸術ホール 大ホール
県央・県西エリア	小田原フィルハーモニー交響楽団	1958	〔第134回定期演奏会〕11月29日(日)14時開演／小田原三の丸ホール 大ホール
	厚木交響楽団	1977	〔第95回定期演奏会〕10月 11日(日)13時30分開演／厚木市文化会館 大ホール
	秦野市民交響楽団	1978	〔第87回定期演奏会〕2027年3月28日(日)14時開演／クアーズテック秦野カルチャーホール 大ホール
	相模原市民交響楽団	1981	〔第44回 相模原市民合同演奏会〕12月20日(日)13時30分開演／相模原市民会館 ホール

伝統ある地域楽団から、新興団体までが互いに刺激し合いながら発展する神奈川のアマチュアオーケストラ——。フィナーレのないハーモニーは、次の世代へと受け継がれていくことでしょう。

上記のリストに、神奈川県内の主なアマチュアオーケストラをまとめました。ほかにも県内では多くの団体が活動しています。

週末、地域のホールをのぞいてみてください。そこにはプロの演奏会とは違った味わいの、人と人のつながりが生み出す温かな響きが待っています。

GREEN
×
EXPO
2027
特集②

GREEN×EXPO 2027で体感する サーキュラー 循環という物語



〔GREEN×EXPO 2027 概要〕

名称: 2027年国際園芸博覧会
International Horticultural Expo 2027, Yokohama, Japan
期間: 2027年3月19日～9月26日(計192日間)
会場: 神奈川県横浜市(旧上瀬谷通信施設)
有料来場目標: 1,000万人以上
テーマ: 「幸せを創る明日の風景」 Scenery of the Future for Happiness
会場はさまざまなエリアで構成され、グリーンテクノロジーや自然と共生するライフスタイルを提案。

GREEN×EXPO 2027は、花や緑を楽しむとともに、建築、衣服、水——会場を彩る一つ一つにも「循環」の物語があるといえます。一体どんな物語が宿っているのか、GREEN×EXPO協会に聞きました。

取材協力: GREEN×EXPO協会 / 構成・文: 福田敬道、藤井賢治 / デザイン: 小山亜紀子

メインゲートのイメージ (2026年8月末現在) 木材の長さや角度をあえてランダムに配置することで、

ぬくもりのある自然な印象を醸し出すデザインです。画像提供: TSP太陽株式会社 ©Expo 2027

会場内の仮設建築物には、リース品やリサイクルが可能な素材等を積極的に活用し、建設から撤去・再利用まで循環する「GREENサーキュラー建築」として環境負荷の低減を図ります。その取組の一環として、全長約92mのメインゲートには大阪・関西万博

GREENサーキュラー建築 資源を循環させる会場づくり

や緑、展示や体験の中に未来を考えるヒントがちりばめられています。楽しみながら学び、暮らし方が少し変わるような「気付きを持ち帰る博覧会」が構想されているのです。

テーマは「幸せを創る明日の風景」です。かつての万博は新技術や物質的な豊かさを紹介する場でしたが、いま私たちは気候変動や生物多様性の損失といった地球規模の課題に直面しています。今回は、そうした課題を踏まえながら、「これからの幸せとは何か」を来場者一人一人が考えるヒントになる場を目指しているといえます。幸せの形は人それぞれであり、会場にも決まった答えはありませんが、花

テーマは「幸せを創る明日の風景」

GREEN×EXPO 2027のテーマは「幸せを創る明日の風景」です。



横浜の水道は、約100年前から道志川(山梨県)を水源の一つとして利用しています。一日に約170平方メートルの水が川井浄水場へ送られます。

環境負荷低減をさらに体感できるのが「リフィル・サーキュラージュプロジェクト」です。会場には40か所以上の無料給水スポットが設置され、参加者はマイボトルに水を補給(リフィル)しながら会場を巡ることができます。そこで提供される横浜の水道水には、外国船員たちから「赤道を越えても腐らない水」と称賛された歴史があります。また、会場周辺へ水を送る川井浄水場の配水には、電力に依存しない自然流下方式が採用されています。これは二酸化炭素排出量の低減と災

ひと口の水にも宿る物語

害時の安定給水のため、GREEN×EXPO 2027のコンセプトに符合するものです。

暑さ対策としての給水、水資源の大切さへの気付き、そして環境負荷の低減など、マイボトルに水を注ぐという小さな行動の中にも、循環の物語が込められています。花や緑を鑑賞するだけでなく、その背景にある「循環」を体感できることこそ、GREEN×EXPO 2027の大きな魅力といえるでしょう。

チケット情報

「1日券」はもちろん、会期中いつでも何度でも入場可能な「通期パス」など、選んで購入できます。購入手続きは二次元バーコードから。



ボランティア・アテンドスタッフのユニフォーム 植物由来の素材を用いた資源循環型のユニフォームです。使用後に回収されて堆肥化される仕組みが実証されます。

資源循環インフラ「P-FACTS (ピーファクト)」

植物由来の繊維製品を回収・堆肥化し、新たな植物資源として循環利用する仕組みです。衣類を自然に還し、持続可能な資源循環社会の実現を目指します。



画像提供: GREEN×EXPO協会

のアイランドパビリオンで使われた木材約1000本が再利用されます。さらに会場を構成する花や樹木、建物、土に至るまで、閉幕後にも続く利用を見据えて準備されています。大量の資源を消費するイベントではなく、次の世代へつなげる循環の仕組みを表現する場なのです。

ユニフォームが語る循環ストーリー

循環は建築物だけではありません。会場で活動する約1万2000人のボランティアらのユニフォームも、使い捨てにはしません。植物由来を基本とした素材で制作したユニフォー

ムの繊維を回収し、堆肥化を通じて再び自然へ還す資源循環インフラ「P-FACTS」を導入します。化学繊維のリサイクルとは異なり、一度土に還すことで、資源を自然の大きな循環へとつなげる試みです。植物由来の素材が循環する過程を見せるため、会場には堆肥化を紹介するコーナーも設けられる予定です。服は着たら終わりでなく、新たな命を育む資源へと生まれ変わります。1990年の大阪花博がガーデニング文化を広げ、2005年の愛・地球博が資源分別への意識を高めたように、今回は「資源循環」が新たな生活文化として提示されます。